

AWA伝統芸能創造発信プロジェクト2018

太夫・三味線

From 大阪



竹本 住蝶

1978年 豊澤住造に入門、竹本住蝶と名乗る
1979年 財団法人人形浄瑠璃因協会女子部公演で『橋弁慶』で初舞台
1981年 財団法人人形浄瑠璃因協会奨励賞 受賞
1989年 財団法人人形浄瑠璃因協会奨励賞 受賞
1992年 財団法人人形浄瑠璃因協会奨励賞 受賞
1995年 若手女流義太夫勉強会「筍会」の一員として、第13回咲くやこの花賞音楽部門 受賞
2005年 豊澤住造没後、鶴澤清介師の預りとなる。演目により、竹本住太夫、豊竹嶋太夫両師に師事
2009年 重要無形文化財「義太夫節」総合指定保持者認定
現在、「瑠璃の会」「咲くやな文太夫の会」など女流義太夫演奏会の他、大阪における義太夫普及・振興を目的に、幅広い世代に向けてワークショップやレクチャー＆デモンストレーションを精力的に行っている。



豊澤 住輔

1980年 豊澤住造に入門、豊澤住輔と名乗る
1981年 人形浄瑠璃因協会女子部公演にて初舞台
1992年 (財)人形浄瑠璃因協会 奨励賞受賞
1995年 若手女流義太夫勉強会「筍会」の一員として第13回 咲くやこの花賞音楽部門 受賞
2005年 豊澤住造没後、鶴澤清介師の預りとなる
2009年 重要無形文化財「義太夫節」総合指定保持者認定
現在、「瑠璃の会」「咲くやな文太夫の会」など女流義太夫演奏会の他、大阪における義太夫普及・振興を目的に、幅広い世代に向けてワークショップやレクチャー＆デモンストレーションを精力的に行っている。

From 徳島・淡路

人間国宝故鶴澤友路師に師事する、徳島の太夫・竹本友和嘉と淡路人形座の三味線・鶴澤友勇が、徳島と淡路を人形浄瑠璃で盛り上げようとした結成した阿波路会。



竹本 友和嘉(阿波路会)

1976年 初舞台(母・豊澤町子に師事)
1997年 鶴澤友路師(人間国宝)より竹本友和嘉を拝命し、友和嘉会を発足
2002年 人形浄瑠璃因協会奨励賞
2007年 東京国立劇場の「阿波の芸能」人形浄瑠璃公演に出演
2009年 人形浄瑠璃因協会女子部門奨励賞
2014年 鶴澤友勇と共に阿波十郎兵衛屋敷、淡路人形座において、第一回阿波路会公演を開催し、以後、毎年開催
2017年 としま芸術文化奨励賞を受賞
現在、徳島県の浄瑠璃文化のけん引役として、東京・国立演芸場での女流義太夫演奏会に出演するほか、数多くの海外公演にも参加。また演奏活動のみならず、阿波十郎兵衛屋敷では「夏の義太夫教室」を10年に渡って続けるなど、普及活動にも精力的に取り組んでいる。



鶴澤 友勇(阿波路会)

1978年 鶴澤友路師(人間国宝)に入門
1985年 淡路人形座に入座。鶴澤友勇を拝命
2000年 人形浄瑠璃因協会奨励賞
2013年 第33回伝統文化ボーラ賞を受賞
2014年 竹本友和嘉と共に阿波十郎兵衛屋敷、淡路人形座において、第一回阿波路会公演を開催し、以後、毎年開催
義太夫節三味線奏者として淡路島の郷土芸能・人形浄瑠璃の普及に取り組みつつ、数多くの海外公演にも参加。また国立劇場・京都造形芸術大学「春秋座」、義太夫節保存会が主催する女流義太夫演奏会などへの出演。小中学校対象の「義太夫節三味線のワークショップ」や、南あわじ市立三原中学校郷土芸能部の太夫、三味線の指導など幅広く活躍。重要無形文化財「義太夫節」総合指定保持者。

From 東京

女流義太夫演奏会から異ジャンルとの共演に至るまで、古典の継承をベースとしながらも普及活動と新たな展開を模索する太夫・竹本越若、三味線・鶴澤津賀寿。



竹本 越若

1972年 (社)義太夫協会「義太夫教室」25期修了
1973年 竹本越若として本牧亭にて初舞台
2000年 重要無形文化財「義太夫節」総合指定保持者認定
現在、小・中学生へのレクチャー＆デモンストレーションやワークショップ、また(一社)義太夫協会主催の義太夫教室講師をはじめとして、プロ、アマチュア問わず後進の指導育成に精力的に取り組んでいる。
また、現代との接点をテーマに独自の視点で義太夫節のライブを次々に企画し、若い世代や普段馴染みの薄い方々への普及活動に励んでいる。



鶴澤 津賀寿

1984年 竹本駒之助に入門。三味線を四代目野澤錦糸に師事
1986年 駒之助の義母鶴澤三生の幼名津賀寿を継ぎ、本牧亭にて初舞台。鶴澤重輝の預かり弟子となる
1996年 第47回芸術選奨文部大臣賞新人賞受賞
1997年 同年度第11回清榮会奨励賞受賞
2000年 第4回日本伝統文化振興財団賞受賞
2009年 重要無形文化財「義太夫節」総合指定保持者認定。国立劇場養成課竹本研修講師
現在、女流義太夫演奏会のほか、創作邦楽、J-POP、演劇などジャンルを超えた様々な公演、さらにNHKFM、TV等に度々出演する一方、後進の指導育成に精力的に取り組んでいる。
作曲作品に、京都芸術センター「きりとほろ上人伝」、日本舞踊協会「やじきた抄」、「新道成寺」、花組芝居「毛皮のマー」「黒断鳩」等。

人形



淡路人形座

1964年に吉田傳次郎座の道具類を引き継ぎ、興行を始めた淡路人形座は2014年8月に福良港に移転。常設館での公演、国立劇場などの一般公演の他、後継者団体への指導、全国の伝統人形芝居保存会への協力など、国内外で活躍。

源義経 役(映像)



武谷公雄

大分生まれ。1999年に早稲田大学劇団森に参加して演劇活動を開始。岡崎藝術座、サンブル、範宙遊泳、Q、ホエイなど、注目の演劇カンパニーに出演。木ノ下歌舞伎には「黒塚」「三人吉三」「心中天の網島」「義経千本桜」に出演。2017年には「エジソン最後の発明」(青木豪演出)に出演した。映画やTVCでも活躍している。

主 催 公益財団法人徳島県文化振興財団
共 催 一般社団法人徳島新聞社
企画制作 古典空間
映 像 高村佳典
事業協力 一般社団法人義太夫協会
助 成 平成29年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業、一般財団法人地域創造、文化立県とくしま推進会議 文化の力によるまちづくり支援事業
後 援 四国放送株式会社、株式会社エフエム徳島



阿波銀行
阿波銀行は徳島県の文化振興を応援しています。

AWA Traditional Performing Arts

2018.2.2-2.4

3日
土



section 3

新演出魁淨瑠璃 るりあろ絵巻

公演日 平成30年2月3日土
19:00 - 21:00

会 場 あわぎんホール1Fホール
(徳島県郷土文化会館)

Meeting in

浄瑠璃

演目

よしつねせんぽんざくら

『義経千本桜』

「すし屋の段」より

太夫:竹本住蝶
三味線:豊澤住輔

いちのたにふたばぐんき

『一谷嫩軍記』

「組討の段」より

太夫:竹本友和嘉
三味線:鶴澤友勇
人形:淡路人形座

いちのたにふたばぐんき

『一谷嫩軍記』

「熊谷陣屋の段」より

太夫:竹本越若
三味線:鶴澤津賀寿

歴史の裏側～時代物浄瑠璃の魅力

現代の医師が幕末の日本にタイムスリップするという設定の漫画『JIN—仁—』(村上もとか作)が大ヒットし、大沢たかおさんの主演でテレビドラマにもなったことを記憶している方も多いのではないでしょうか。主人公は江戸時代の人々の病を治療するうち、坂本龍馬を始めとする歴史上の有名人たちとも知り合い、龍馬が暗殺されるという歴史を変えようと奮闘します。

タイムスリップという「非現実的」な設定をとらなくても、「あの歴史の有名人の近くにこんな知られざる人物がいた」「あの歴史上の出来事の裏側にはこんな真実が隠されていた」といった形で語られる小説・漫画・映画などは数え切れないでしょう。

江戸時代の演劇である人形浄瑠璃も、そういう作品を数多く上演しました。浄瑠璃というと「近松門左衛門」という名前や、彼が書いた「心中物」を思い浮かべる方もいらっしゃるでしょう。しかし、心中を始めとする同時代の出来事や社会を描いた「世話物」は、実は江戸時代の人形浄瑠璃では中心的な存在ではありませんでした。江戸時代の人形浄瑠璃の劇場では世話物はふつう、古代から中世の出来事を描いた「時代物」がたっぷりと時間をかけて上演された後に出来ました。メインディッシュの後のデザートのような感覚でしょうか。

そして、この時代物浄瑠璃の多くが、「歴史の裏側の隠された真実」を描いていたり、その主人公は歴史を変えようと奮闘する人物だったりするのです。本日お目に掛ける「義経千本桜」と「一谷嫩軍記」という作品は、260年以上前に並木宗輔(千柳)という人が中心となって書いたものです。宗輔は、12世紀に起きた源氏と平家の争いを描いた『平家物語』に強い関心を抱いていました。そして、『平家物語』にも記される重要ないきの裏側に隠された「真実」を明らかにしますよ、という姿勢でこの両作品を作ったのです。

このように書くと、「では歴史の事実や『平家物語』の内容を知らないと時代物の浄瑠璃は楽しめないんじゃない?」と思われるかもしれません。はい、そうです。江戸時代の人々にとっては、『平家物語』に書かれていることは、だいたい常識として知っていることでしたが、現代の私たちにとっては必ずしも親しみ深いとはいえない。江戸時代の人々と同じように「これらの作品を楽しむことは、なかなかに困難です。しかし、並木宗輔という日本の演劇の歴史でも屈指の作者、そしてこれらの作品を二百数十年にわたって演じ継ぎ、洗練を加えてきた各時代の名人たちの力を甘く見てはいけません。最低限のポイントさえ押さえておけば、私たちもそれなりに、いや場合によっては江戸時代の観客以上に時代物を楽しむことができるかもしれません。

今回の場合、大事なのは次の二点です。まず、平家方には勇敢な平知盛と平教経、そして清盛の直系の孫である平維盛という有力な大将がいたが、維盛は源氏とのいきを前にして失踪して入水自殺をした。知盛と教経は壇ノ浦の戦いで活躍を見せるも、最後は海に沈んでいた、ということ。そして、一の谷の戦いでは、源氏方の熊谷直実という武将が自分の息子と同年代である平敦盛の命を奪わねばならなかったことから無常を感じ、後に出家することになったということ。だいたいこのようなことが『平家物語』には書かれています。このパンフレットには念のため作品のあらすじを載せておきますが、「結末を知らずに楽しみたい!」という方は、そちらは読まずに、以上のようなことを、何となく覚えておいていただければと思います。

人形浄瑠璃に用いられる義太夫節の浄瑠璃は、江戸時代には日本全国で親しまれましたが、なかでも淡路島を含む阿波国は、義太夫節発祥の地である大阪に次ぐ本場でした。その地で、江戸時代の人々が愛した時代物の浄瑠璃の魅力の一端に触れていただければ幸いです。

「義経千本桜」あらすじ

延享4年(1747)11月大坂・竹本座初演
二代目竹田出雲・三好松洛・並木千柳(宗輔)作

源義経は平家との戦いに大勝利を収める。平家の有力な大将である平知盛・教経、そして安徳天皇は海に沈んだとされているが、実は行方不明となっていた。義経は悪人たちの計略によって兄である頼朝に謀反を疑われながらも、平家の武将たちと天皇の搜索を続ける。(初段)

家来の弁慶の軽率な行動から追っ手のかかる身となった義経は、愛妾の静御前を家来の佐藤忠信に預け、大物浦(現・兵庫県尼崎市)から船に乘ろうとする。義経が逗留する船宿の主人は実は知盛、その娘と妻は安徳天皇とその乳母であった。知盛は海上で義経を襲うが、彼の正体を見抜いていた義経と家来たちの前に敗れる。知盛は平家の滅亡は清盛の多くの悪事の報いであると悟り、碇を担いで海に身を投げる。(二段目)

源氏とのいきを前に姿を消した平維盛は、父の重盛に恩を受けた大和国下市村のすし屋の亭主・弥左衛門に匿われ、店の下男・弥助に姿を変えていた。ある晩、追っ手に追われた維盛の奥方と若君が偶然すし屋に逃げ込み、維盛と再会を果たす。すし屋の娘・お里は、恋仲になっていた弥助が実は維盛であったことを知り、身分違いの恋をしたことを嘆く。追っ手が迫り、お里は維盛一家を逃がすが、お里の兄で不良息子の権太が一家を追いかける。頼朝の家来・梶原景時が弥左衛門らを責めるところへ、権太が維盛の首と生け捕りにした奥方・若君を連れて現れ、梶原に褒美を求める。梶原が奥方を受け取って去ると、激怒した弥左衛

門は権太を刺すが、瀕死の権太は梶原に渡した首は偽物、奥方と若君は自分の妻子であると明かす。梶原が権太に与えた陣羽織を維盛が裂くと、中から袈裟と数珠が現れ、頼朝が密かに維盛の命を助けて出家させるつもりであったことが判明する。(三段目)

静御前は忠信とともに、吉野山の山中に身を隠している義経のもとへ向かうが、忠信は道中でしばしば不思議な振る舞いを見せる。忠信に面会した義経は静のことを尋ねるが、忠信の返答が要領を得ないため怒る。そこへまたしても忠信がやってきたという知らせが入る。義経は怪しみ、やがて姿を見せた静に詮議を命じる。静が義経から預かった初音の鼓を打つと、もう一人の忠信が姿を現す。実は、静に付き従っていたのは忠信に化けた狐で、初音の鼓の皮はこの狐の両親から作られたものであった。本物の忠信に迷惑をかけたため狐忠信は姿を消すが、親子の別れを悲しんで鼓は音を出さなくなる。義経と静がこれを憐れむと、狐は再び姿を見せ、義経から静を守護した褒美として鼓を与えられる。義経の命を狙って悪法師たちが攻め寄せるが、狐が幻術でこれを防ぐ。義経は法師の一人・横川の覚範の正体を平教経と見破り、安徳天皇を渡した上で、後日の決戦を約束する。(四段目)

忠信と教経が争うところへ、狐忠信も姿を現して教経を翻弄する。義経が現れて、安徳天皇が出家したことを告げる。教経は、義経と頼朝の不和を煽るなどした悪人・藤原朝方を討った後、忠信に討たれる。(五段目)

「一谷嫩軍記」あらすじ(今回上演される場面に関わる部分のみ)

宝暦元年(1751)11月大坂・豊竹座初演

並木宗輔作(宗輔は三段目までを一人で執筆して没したため、浅田一鳥らが四段目・五段目を執筆)

平家追討を命じられ京都に入った源義経は、家来の岡部六弥太と熊谷直実を呼び出し、それぞれに短冊を付けた山桜の枝と弁慶の書いた制札(立て札)とを渡す。そして、六弥太には平忠度の陣所に赴いて『千載集』入集を伝えること、直実には須磨の陣所にある若木の桜の前に制札を立て、木を守るよう命令する。一方、平家の武将・平經盛の館では出陣を前にした經盛が、息子・敦盛が実は後白河法皇の落胤であることを明かす。經盛は敦盛に、母の藤の方、許嫁の玉織姫とともに都へ戻るよう説く。しかし、敦盛は經盛を追って出陣する。さらに玉織姫と藤の方も敦盛の跡を追う。(初段)

敦盛が固める一の谷の陣所に、直実の息子・小次郎が一番乗りでやってくる。小次郎は陣内から漏れる管弦の音の優雅さに聞き惚れ、地方に生まれ育った自分の身を顧みるが、平山武者所に急かされて陣内に駆け入る。駆け付けた直実は平家の陣所から負傷した小次郎を救い出し、連れ帰る。敦盛が姿を見せ、平山を追って行く。敦盛から逃れた平山は、玉織姫を発見して口説くが、争う内に玉織姫を殺害する。敦盛は浜辺で直実に呼び止められ、勝負する。直実は敦盛を組み敷くが、息子の小次郎と同年代の敦盛を討つに忍びなく、見逃そうとするが、平山に見咎められ、やむを得ず敦盛の首を討つ。瀕死の重傷を負った玉織姫がこれを聞きつけ、首に最後の対面がしたいと言う。直実はもはや目も見えない玉織姫に首を渡すと、姫は息絶える。直実は敦盛の亡骸を馬に乗せ、泣く泣く去って行く。(二段目)

摂津國御影の里の石屋・弥陀六のもとに、素性の知れない青年が訪れて石塔の建立を依頼する。弥陀六の娘は青年に恋慕するが、青年は訳有って娘の思いには応えられないことを告げ、形見として笛を与える。弥陀六は青年と石塔を見に行くが、いつの間にか青年は姿を消してしまう。弥陀六と所の人々が不思議がるところへ、源氏の侍に追われた藤の方が逃げてくる。藤の方は、弥陀六の娘が持つ笛を見て、敦盛の持っていた「青葉の笛」だと言う。敦盛が直実に討たれたことを噂に聞いていた人々は、青年は敦盛の幽霊だったのかと驚く。

直実の妻・相模は初陣の小次郎の身を案じるう、直実の陣屋まで訪ねてきてしまう。そこへ藤の方が逃げ込む。かつて藤の方に仕えていた相模は再会を喜ぶが、藤の方は敦盛を討ったのが相模の夫であることを知り、敵討ちの手助けを迫る。そこへ梶原景高が弥陀六を捕らえてやってくるので、相模は藤の方を匿す。敦盛の墓参りから戻った直実に藤の方が斬りかかるので、直実は敦盛を討った様子を詳しく物語る。藤の方が回向のために青葉の笛を吹くと、障子に敦盛の影が映るが、障子を開けるとそこにあったのは敦盛の鎧だった。直実が首実検のため義経の陣所に向かおうすると、奥から義経が姿を現す。直実が義経に見せた首は敦盛ではなく小次郎の首であった。直実は制札に書かれた「一枝を伐らば一指を剪るべし」(枝を一本切った者は、その指を一本切って罰する)という文句の裏に、後白河法皇の子である敦盛を助けるために、我が子の小次郎を身替わりにせよ、という義経の心があることを察し、小次郎を敦盛と偽って討ったのだ。梶原がこのことを鎌倉に報告すると駆け出すが、弥陀六に討たれる。義経は弥陀六を呼び止め、その正体が平家の侍・弥平兵衛宗清であると見抜く。幼い頃に自分や頼朝の命を救ってくれた宗清に感謝した義経は、中に敦盛を忍ばせた鎧櫃を与える。家を伝えるべき子を失った直実は出家を願い、義経は小次郎の首を須磨寺に葬り、末世まで敦盛の首と伝えることを約束し、人々は別れる。(三段目)

プロフィール



三浦 しをん
小説家

東京生まれ。2000年、小説『格闘する者に○』でデビュー。2006年『まほろ駅前多田便利軒』で直木賞、2012年『舟を編む』で本屋大賞、2015年『あの家に暮らす四人の女』で織田作之助賞を受賞。小説に『仏果を得ず』『光』『神去なあな日常』など、エッセイに『あやつられ文楽鑑賞』『ぐるぐる博物館』など著作多数。



葛西 聖司
古典芸能解説者

東京生まれ。中央大学法学部卒業。NHKアナウンサーとしてテレビ、ラジオ数多くの番組を担当。現在は古典芸能の解説や講演などを全国で展開。【著書】『僕らの歌舞伎』『文楽のツボ』『名セリフの力』『能狂言なんでも質問箱』ほか多数。早稲田大学公開講座、NHK文化センター、朝日カルチャーセンター講師。

日置 貴之
白百合女子大学准教授

東京都生まれ。早稲田大学第一文学部卒業、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士(文学)。江戸時代末期から明治時代を中心に歌舞伎を研究している。著書『変貌する時代のなかの歌舞伎 幕末・明治期歌舞伎史』(笠間書院、2016年)など。白百合女子大学准教授。

(解説・あらすじ:日置 貴之)

2018.2.2(F)-2.4(S)

AWA Traditional

Meeting in

Performing Arts



その昔…

阿波の殿様が蜂須賀と呼ばれていた頃

藍の交易により、全国屈指の商業都市へと成長した「とくしま」

藍がもたらした果実により、様々な芸術文化が「とくしま」に根をおろす

三味線を代表とする「邦楽」、

人形と義太夫節が一体となった「阿波人形浄瑠璃」、

そして……「阿波踊り」

時を移して

栄枯盛衰を繰り返し、現在に受け継がれている「阿波藍」と「伝統芸能」

現代のフィルターを通して、

私たち「とくしま人」に根づく貴重な文化遺産が、

今、あらたに「華」ひらく！

その名は

AWA伝統芸能創造発信プロジェクト

いざ、開幕！



AWA伝統芸能創造発信プロジェクト2018

公演日 平成30年2月2日金・3日土・4日日

会場 あわぎんホール(徳島県郷土文化会館)1Fホール

	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00
2日 金										section 1 19:00-21:00
3日 土			section 2 13:00-15:00							section 3 19:00-21:00
4日 日				section 4 ① 13:30-15:30		section 4 ② 17:30-19:30				

(section4の①と②は同内容です)

AWA Traditional Performing Arts Meeting in 2018

入場料

各公演 | 1回公演券(前売・当日共通料金)

一般指定席 2,000円 学生指定席(小中高) 1,000円

窓口販売 1回公演券のみのお取り扱いになります

インターネット限定販売 あわぎんホールチケット会員のみ

※あわぎんホールチケット会員は登録無料です。ぜひこの機会にご登録ください。

一般指定席

学生指定席(小中高)

1回公演券: 2,000円

1回公演券: 1,000円

2回公演券: 3,400円

2回公演券: 1,700円

3回公演券: 4,800円

3回公演券: 2,400円

4回公演券: 6,000円

4回公演券: 3,000円

※4歳以上、有料。3歳以下は、保護者1名につき1名まで膝上鑑賞無料
(座席が必要な場合は有料)。

複数公演のお買い求めはインターネットがお得!

ブレイガイド

■ あわぎんホール(窓口・電話・インターネット)

※電話もしくはインターネットで予約された方は、全国のセブンイレブンの店頭にて24時間お支払いお受け取いただけます。

※あわぎんホール窓口は会館南側新町川沿いの1階にあります。

※座敷をご利用のお客様は、あわぎんホールにお問い合わせください。

■ 徳島新聞社事業部(平日9:30~17:30)

(徳島新聞各販売店でも取り次ぎます)

チケット発売日 一般発売 | 平成29年12月4日(月)

お問い合わせ

あわぎんホール(徳島県郷土文化会館)

TEL: 088-622-8121 E-Mail: jigyo@kyoubun.or.jp



アクセス
徳島駅より徒歩8分
徳島ICより車で20分
徳島空港より空港連絡バスで25分、徳島駅より8分

近隣駐車場のご案内
あわぎんホールには専用の駐車場がございません。お車でお越しの方は、あわぎんホール東側の「徳島藍鳴門池地下駐車場」(徳島市新町川沿い)をご利用をお勧めします。各駐車場は台数が限られており、駐車できない場合がございますので、公共交通機関のご利用をおおすすめします。

主催 公益財団法人徳島県文化振興財団
共催 一般社団法人徳島新聞社

事業協力 徳島県邦楽協会、徳島県三囃協会
公益社団法人日本舞踊協会徳島県支部

一般社団法人義太夫協会

阿波おどり振興協会、徳島県阿波踊り協会

成 平成29年度文化劇場・音楽堂等活性化事業

一般財團法人地域創造

文化立県づくり推進会議 文化的力によるまちづくり支援事業

後援 四国放送株式会社、株式会社エフエム徳島



阿波銀行
阿波銀行は徳島県の文化振興を応援しています。